

[研究論文]

## 歌曲史におけるアルバン・ベルクの初期歌曲の位置付け —創作の開始から1903年まで—

### Evaluating the History of Alban Berg's Early Lieder —From the Beginning of his Compositions to 1903—

今野哲也

Tetsuya Konno

〈抄 録〉

A. ベルクの初期歌曲の多くは、彼が15歳から25歳の間に作曲されている。その自筆譜は一部を除き、作曲者の死後も閲覧が禁じられたことから、出版が1980年代に持ち越された背景とも相俟って、初期歌曲の網羅的な研究が行われているとは言い難い。本研究の目的は、そうした現状に対して、彼の初期歌曲における一定の位置付けを試みることにある。本稿ではその第一歩として、最初期（1900年頃）から、A. シェーンベルクへの入門前夜の1903年頃までの歌曲を対象とする。

最初期の歌曲には書法の拙さも否めないが、たとえば〈星たちの衰微〉（1902年）には「全音音階」をはじめ、「半減7の和音」の多様な用法、あるいは本研究が「クリスタル和音」と定義する特殊な偶成形態などが認められる。そこに《4つの歌曲》Op. 2の作曲者を読み取ることは早急と言えようが、文学的素養に溢れた、ベルクの歌曲作家としての資質も伺える。そのことから本研究は、歌曲史において、この時期のベルクの歌曲により高い位置付けがなされるべきと結論付ける。

キーワード：アルバン・ベルク、歌曲史、自筆譜、ロマン派の和声、「クリスタル和音」

#### Abstract

Many of Alban Berg's early Lieder were written between the ages of 15-25. The publication of many Lieder did not happen until the 1980s because his autographs were prohibited from being read even after the composer's death except for several works. There it can't be said that his early Lieder were studied comprehensively. The purpose of this study is to try to place Berg's early Lieder against the current situation. As a first step, this study covers Lieder from his most early period (c.1900) to around 1903.

Lieder of Berg's earliest period has a clumsiness in the writing, but the use of whole-tone scales, various half-diminished seventh chords, and the "Kristallakkord" can be found in "Sternenfall" (1902). This study defines "Kristallakkord" as a special chord that is in "fixed positions". It is too hasty to evaluate the composer of "Vier Lieder" Op.2 through "Sternenfall", but in this Lied the traditional Lied Composer's grounding in literature can be seen. From this reason, it is concluded that this study should consider the Lieder in this early period more highly in the history of Berg's Lieder.

Keywords: Alban Berg, Romantic-era harmony, autographs, history of the Lieder, “Kristallakkord”

## 0. 序

A. ベルク (Alban Berg 1885-1935) のはじめての創作の試みは、声楽を学んでいた兄シャーリー (Charly Berg 1881-1952) と、ピアノを弾く妹スマラグダ (Smaragda Berg 1887-1954) のために、1900年頃から書き始めた歌曲からである。そこからおよそ4年後の1904年に、シャーリーがそうした歌曲のいくつかをA. シェーンベルク (Arnold Schönberg 1874-1951) に見せたことがきっかけで、ベルクは、彼の弟子になることが許される訳だが、その中にあっても歌曲は、ベルクにとって重要なジャンルであり続けた。

ベルクの歌曲の大半は、彼が15歳から25歳までの間に集中的に作曲されたものである。Chadwickによれば、《アルテンベルク歌曲集<sup>1)</sup>》Op. 4までのベルクの現存する歌曲作品は、計81曲とされている (1971: 124-5)<sup>2)</sup>。しかし筆者が行った調査では、その総数は95曲にのぼる<sup>3)</sup>。この数字は、J. ブラームス (Johannes Brahms 1833-97) やH. ヴォルフ (Hugo Wolf 1860-1903) のそれとは比量し得ないかも知れないが、Op. 1以降のベルクの寡作度を考えれば、重要視すべき点である。

ベルクの初期歌曲の自筆譜は、作曲者の遺言により何人の目に触れることも禁じられた。のちに妻ヘレーネはオーストリア国立図書館 (Österreichische Nationalbibliothek、以下“ÖNB”) にその管理を委ねたが、彼女の死後も長い間、閲覧禁止の状態では保存され続けた (荒川2000: 2)。そのため、それらの歌曲が公表されたのは、1980年になってからである。そうした背景からも、ベルクの初期歌曲に関する網羅的な研究が行われているとは言い難いものがあり、したがって、これまでの歌曲史の中で、ベルクに正当な評価が成されているかと言え、疑問を呈する余地がある。本研究の目的は、こうした現状に対して、ベルクの初期歌曲に対する一定の位置付けを試みることにある。その意味において、本研究には意義があると考えられる。

ベルクの歌曲の大半が、およそ1900～1910年という限られた期間に書かれたものである。当然、研究対象としてはその全作品を網羅すべきだが、紙面の都合上、本稿ではベルクの創作の開始から、シェーンベルクへの入門前夜、すなわち1903年までの歌曲を対象を限定することとしたい。続く年代の作品に関しては、本研究をその出発点として、過渡的にその位置付けを進めてゆく予定である。ただし本稿の最後に、ベルクの全歌曲を網羅したリスト (以下「歌曲リスト」) 添付しておくので、参照して頂きたい。

## 1. ベルクの初期歌曲の概観

### 1.1 ベルクの歌曲創作の時期

19世紀後半から20世紀初頭において、オーストリア・ハンガリー二重帝国は大きな産業の発展にも後押しされ、大国の地位を築いていた。とくにその都ウィーンは、1873年には万国博覧会も開催され、当時の思想、科学、あるいは芸術など、各分野における新たな潮流の中心にあった。比較的裕福な家庭に生まれたベルクは、美術、文学、そして音楽に没頭する日々を過ごし、古典から、この当時のウィーンに溢れていた新しい芸術までを吸収しながら育った。ベルクの歌曲の多くは、彼の15歳から25歳という多感な時期に、時代的な恩恵を受けながら、集中的に作曲されたものである。

ベルクが創作へと駆り立てられた直接的な原因は、父の死、あるいは自身の持病に直面したこと由来とも言われている<sup>4)</sup>。しかもその作品の多くは、兄や妹と一緒に家庭内で演奏することを目的

に書かれた歌曲で、公開を目的として作曲されたものではなかった。作曲者の生前に出版された歌曲がきわめて少ない理由も、このことが一つの要因になっていると言えよう。

ベルクがシェーンベルクをはじめ訪れた頃には、歌曲以外のジャンルの作曲がままならなかったというエピソードがある(Scherliess 1985: 35)。しかし一旦、修業を開始するや、ベルクは和声、対位法、そしてフーガの学習に勤しむようになり、器楽的な技術を短期間で修得してゆくことになる。その中で、《ピアノ・ソナタ》Op. 1、《4つの歌曲》Op. 2、《弦楽四重奏曲》Op. 3、《アルテンベルク歌曲集》Op. 4が生み出されてゆく訳だが<sup>5)</sup>、ベルクの器楽的手腕が上達することに反比例するかのように、歌曲創作は縮小してゆくことになる(荒川2000: 2)。

## 1.2 ベルクの初期歌曲の公表・出版状況

ベルクの生前に出版された初期歌曲は、《初期の7つの歌》(以下7fL)、〈私の両目を閉じて下さい〉(JL2.-75)、《4つの歌曲》Op. 2、《アルテンベルク歌曲集》Op. 4(全5曲)、そして1925年に二度目に書かれた〈私の両目を閉じて下さい〉のわずか18曲である<sup>6)</sup>。その後は、ベルクの認可の下に、〈ロイコン〉(JL 2-79)がReichの著作で1963年に公表されているに過ぎない。それだけにこの18曲は、ベルクの厳しい自己批評に耐え得た、稀有な初期歌曲と言える。

前述のとおり、ベルクの初期歌曲の自筆譜が長期間、閲覧が禁じられていたことから、上記以外の作品が公になるのは、ようやく1980年代に入ってからのことである。とりわけ全2巻からなる“Jugendlieder”には、46曲の歌曲が所収されており、ベルクの初期歌曲を知る上では重要な資料と言える。しかし、実際の自筆譜に収められている歌曲は、第1巻(以下JL 1)が34曲、第2巻(以下JL 2)が41曲であることから、すべての歌曲が網羅されている訳ではない。そのため本稿執筆時において、出版されているベルクの歌曲は、全95曲中、65曲に留まることに帰結される。

## 1.3 先行研究

ベルクの初期歌曲を網羅的に取り扱った文献としては、Redlich (1957)、Chadwick (1971)、荒川(2000)、Adams (2008)などがあげられる。たとえば、Chadwickはベルクの歌曲を4期に区分し、第1期にはG. マーラー(Gustav Mahler 1860-1911)、第2期にはR. シュトラウス(Richard Strauss 1864-1949)とH. ヴォルフ、第3期にはJ. ブラームス、そして第4期にはシェーンベルクからの影響を指摘している。しかし、各々の作曲家の影響を示す楽曲分析には説得力に欠け、この4つの区分も恣意的と言わざるを得ない。その他の先行研究の多くは、一部の作品を対象が集中する傾向があり(とくにOp. 2やOp. 4)、また歌曲史における記述も、新ウィーン学派との連関による、わずかな記述が見出されるだけである。その意味において、ベルクの初期歌曲の網羅的な研究が進んでいるとは言い難いものがある。

## 1.4 テクストについて

ベルクが歌曲の歌詞として取り上げた詩は、古典から同時代の作品まで、多岐に亘っている。古典派以降の作家としては、J. W. v. ゲーテ(Johann Wolfgang von Goethe 1749-1832)、F. リュッケルト(Friedrich Rückert 1788-1866)、J. v. アイヒェンドルフ(Joseph von Eichendorff 1788-1857)、H. ハイネ(Heinrich Heine 1797-1856)をあげることができる。

ゲーテの詩からは、〈はじめての喪失〉(JL 2-36<sup>7)</sup>)、〈人間の限界〉(JL 2-62)、〈ミニヨン〉(JL 2-70)、〈マホメッドの歌〉(a<sup>8)</sup>)、〈高貴なアサン將軍婦人の嘆きの歌〉(b)など比較的、多くの作品が選ばれている。リュッケルトからは〈遠くからの歌〉(JL 1-16)、〈私は野をよけて通りたい〉(JL 1-

17)、アイヒェンドルフからは〈私たちが見るものが変わってゆく〉(JL. 1-27)、ハイネからは〈夢中になった人よ、美しき女性よ〉(JL. 1-11)、〈憧れII〉(JL. 1-12)、〈美しき恋人よ〉(JL. 1-18)が選ばれている。

ベルクと同時代の詩としては、P. アルテンベルク (Peter Altenberg 1859-1919)、J. シュラーフ (Johannes Schlaf 1862-1941)、C. ブッセ (Carl Busse 1872-1918)、A. モンベルト (Alfred Mombert 1872-1942)、R. M. リルケ (Rainer Maria Rilke 1875-1926) らの作品があげられる。

アルテンベルクの詩は、〈悲哀〉(JL. 2-54)、〈希望〉(JL. 2-55)、〈フルート吹きの少女〉(JL. 2-56)に、《アルテンベルク歌曲集<sup>9)</sup>》Op. 4の5曲を加えると、計8曲で取り上げられている。この数はベルクが取り上げた詩人の中では最多である。シュラーフからは〈部屋の中で〉(JL. 2-45)、〈冬〉(JL. 2-49)、〈雨〉(JL. 2-53)の3曲、ブッセからは〈僕と君〉(JL. 2-39)、〈山を越えて〉(JL. 2-43)、〈静まりかえった王国〉(JL. 2-78)の3曲、リルケからは〈愛〉(JL. 1-28)、〈お針子〉(JL. 2-35)、〈完成された夢〉(JL. 2-73 / 7FL-4)の3曲が選ばれている。モンベルトの詩からは〈散歩〉(JL. 2-57)の他に、Op. 2の〈眠っている私は運ばれる〉(第2曲)、〈今や私は巨人たちの最も強い者に打ち勝った〉(第3曲)、〈微風は暖かく〉(第4曲)が選ばれている。

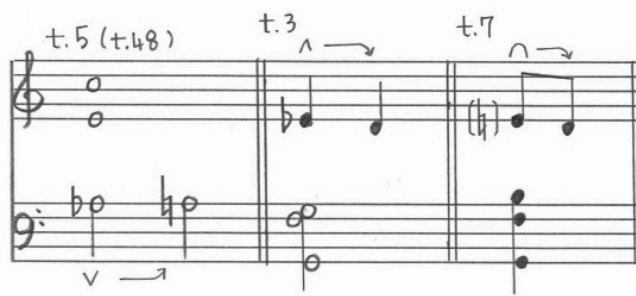
こうしたデータからも、渡辺が指摘するように、ベルクの文学的関心の幅の広さと、新しい文学に対する柔軟な姿勢が伺える(1997: 202)。詩の傾向としては、比較的、抒情的な内容が多く見られるが、〈深遠な憧れ〉(JL. 2-42)のようなユーモラスな内容や、〈高貴なアサン將軍婦人の嘆きの歌〉(b)のような叙事詩も見出される。また、アルテンベルクのアフォリスティックなテキストを除けば、基本的には韻が踏まれている詩が選ばれている。

## 2. ベルクの初期歌曲の分析

### 2.1 1900-1年頃の作品

〈神聖なる天〉(JL. 1-1)には、楽典上の誤りも見出されるものの、独学なりに工夫を凝らした作曲語法も認められる。たとえば第5小節や第48小節の第1拍には、ベルクが好んで使った、偶成としての増3和音が見出されるし、第30小節から第31小節にかけては、半音階的動向を用いることで、より複雑な和声が形成されている。とくに第37小節での、主調C-durに対するH-durへの転調は効果的である。〈秋の予感〉(JL. 1-2)には、属7の和音の第5音が短2度あるいは長2度転位することで結果的に生じる、属7の和音に第13音を付加した形の偶成(V7(13))が明確に見出される。この偶成をベルクは非常に好み、この後の作品でも随所で用いられることになる。

〈菩提樹の下で〉(JL. 1-3)すなわち[Unter der Linde(n)]のタイトルからは、F. シューベルト (Franz Schubert 1797-1828)の〈菩提樹Der Lindenbaum〉を彷彿させられるものがある。この曲では、主調のC-durの他には、d-mollとD-durしか用いられないため、和声構造としては単純なものである。しかし、ここでは「減7の和音<sup>10)</sup>」や「半減7の和音<sup>11)</sup>」へのひびきが明らかに意識されており、とくに第27小節での「半減7の和音」を媒体とした、d-mollからC-durへの転義は留意したい点である。



「譜例1」〈神聖なる天〉の増3和音（左）／〈秋の予感〉のV7 (-13)（中央）とV7 (13)（右）

## 2.2 1902年頃の作品

1902年には比較的、多くの作品が作曲されている。〈戯れる人たち〉(JL. 1-4)には「半減7の和音」、「減7の和音」、そして「属7の和音<sup>12)</sup>」を媒介とする転義が見出される。たとえば、第16小節(第39小節も)の第4拍では、属7の和音と属9の和音の根音省略形体(第5音上方変位)との、異名同音的転義によるG-durからDes-durへの転調が行われている。〈キンザグリはどこに〉(JL. 1-5)はC-durで一貫される作品だが、「半減7の和音」を意図的にひびかせることで、和声構造の単調さを回避している。またここには、第16-17小節の第4拍のように、複雑な音響を生じさせようとする意図も見出される。〈別れAbschied〉(JL. 1-7)でもc-mollしか用いられないが、旋律の動向により、増3和音や(第3、5小節の第2拍)、「半減7の和音」の効果を生み出している(第6小節)。〈愛の歌〉(JL. 1-8)では、増3和音(第12-14小節の第3-4拍)や、偶成のV7 (-13)など(第23小節の第3-4拍)、ベルクが好んだひびきを明確に聴くことができる。〈いくつもの夜を越えて〉(JL. 1-9)では、主調と属調(とその同主調)しか用いられないが、旋律線での倚音の効果が、単純な和声構造を補っている。たとえば第11、15、21小節の第3拍には、長調のV7 (13)を聴くことができるし、iv度上の7の和音に第9音がひびく偶成が、冒頭小節の他、各所に見出される。

この時期には、〈憧れI〉(JL. 1-10)、〈憧れII〉(JL. 1-12)、〈憧れIII〉(JL. 1-14)という三つの〈憧れSehnsucht〉が作曲されている。〈憧れI〉と〈憧れIII〉はP. ホーエンベルク(Paul Hohenberg 1885-1956)の詩によるものだが、内容はどちらも異なる。〈憧れII〉ではハイネの詩が用いられている。〈憧れI〉は、序奏と後奏で用いられる、第5音下方変位の属7の和音が印象的である。〈憧れII〉は単純な4声体書法で書かれた作品ではあるが、とりわけ「半減7の和音」による転義の技法には注意を引かれる。たとえば第11-12小節の第1-2拍では、「半減7の和音」を媒体として、c-mollからes-moll、そしてes-mollからf-mollへの転調が行われている。また「減7の和音」も効果的で随所に取り入れられている。

〈憧れIII〉の第5小節の第4拍には、留意すべき和声技法が見出される。それは「クリスタル和音」(以下、「Kr.」)の使用である。Kr.とは、音楽理論家の島岡譲(1926-)による概念で、「減7の和音を原和音とする偶成非和音で、そのいずれかの構成音が長2度上方転位したときに生ずる偶成形態」と定義される<sup>13)</sup>。第5小節の第4拍は、G-durにおける短9の和音のドッペルドミナントだが、その第5音が長2度上に転位することで、典型的なKr.が生じている。またその弱拍でも、第9音が長2度上に転位して、新たなKr.が生じている。また〈憧れIII〉の第12小節には、属7の和音の転義によるa-mollからEs-durへの転調が見出される。〈憧れIII〉はC-durで開始し、a-mollで終結する和声構造を持つが、ベルクの初期歌曲には、開始と終結の調が異なる作品がしばしば見出される。たとえば〈戯れる人たち〉

はC-durで開始しEs-durで終結する和声構造であるし、〈船乗りの娘の苦悩〉(JL. 1-6)はH-durで開始しe-mollで終結する。〈夢中になった人よ、美しき女性よ〉(JL. 1-11)の大部分はg-mollで書かれているが、終結間際に置かれるH-durは印象的である。



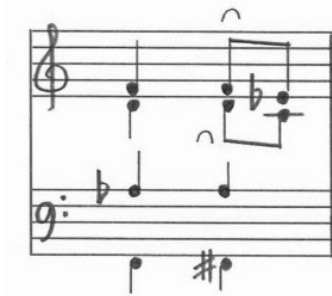
「譜例2」〈憧れIII〉(JL. 1-14)の第5小節の第4拍の「クリスタル和音」

この時代の歌曲において、とくに〈星たちの衰微〉(JL. 1-13)は、和声技法の観点から〈憧れIII〉とともに留意しておきたい作品である。その理由として、第一には「全音音階」に基づく、第5音が上下に変位した属7の和音の使用である(第17小節の第3拍)。ベルクに対するC. ドビュッシー(Claude Debussy 1862-1918)からの影響は、Stuckenschmidt(1966: 453-459)、荒川(2000: 5)らが指摘するところであるが、このわずかな例から、直ちにドビュッシーと結び付けて解釈することは拙速と言えよう。しかし、その後におけるベルクの全音音階への嗜好性が、無調性作品に至ってもなお続いてゆくことを考慮すると、見過ごし得ない一例である。第二には、Kr.の使用をあげられる。第18小節の第1拍と第3拍には、G-durでのドッペルドミナントの短9の和音における根音省略形の第5音が転位することで、典型的なKr.が生じている。ここでのKr.は、もはや偶発的なものではなく、明らかにその音響効果が意識されていることが伺える。第三には「半減7の和音」の多用である。〈星たちの衰微〉では、さまざまな箇所、その多様性を生かした「半減7の和音」の使用が認められる。この例を以て、ロマン派で愛好されてきた「半減7の和音」を、ベルクが自由に扱い得るレベルに達したことの証左としても、壮語ではないと考える。

### 2.3 1903年頃の作品

1903年頃に作曲されたと見られる歌曲<sup>14)</sup>には、とくに和声技法の観点でベルクの進化が見出される。〈私は君を愛している!〉(JL. 1-15)の第12小節では、「半減7の和音」を媒体とするb-mollからDes-durへの転義など、「半減7の和音」の効果的な使用も認められる。またこの歌曲はa-mollで開始し、fis-mollで終結する構造を持つ。〈遠くからの歌〉(JL. 1-16)は、和声構造の点で興味深いものがある。すなわち主調g-mollで開始し、終結間際にh-moll→Fis-dur→G-durへと転調し、最後に同主短調g-mollへ回帰するという和声構造である。〈私は野をよけて通りたい〉(JL. 1-17)にも「半減7の和音」の転義が見出される。またこの歌曲はcis-mollで開始し、gis-mollで終結する。〈美しき恋人よ〉(JL. 1-18)の第5小節の第1拍の原和音は減3和音だが、構成音が長2度転位することで、きわめてKr.に近い効果を生み出している。さらに〈美しき恋人よ〉の第32小節には、V7(-13)を媒体とした異名同音的転義が見出される。なおこの歌曲はc-mollで開始し、As-durで終結する和声構造を持つ。〈影の生命〉(JL. 1-19)もe-mollで開始し、H-durで終結する和声構造を持つ。また〈夕方に〉(JL. 1-20)もF-dur開始し、c-mollで終結する。〈夕方に〉には「属7の和音」の転義や、「半減7の和音」の転義も見出される。

〈幻影が蘇るとき〉(JL. 1-21)には、「増6の和音<sup>15)</sup>」の効果的な使用が認められる。すなわち第2小節の第2拍、ならびに第5小節の第2拍には、増6の和音の構成音のうち2音が転位することで、きわめて緊張感のある偶成和音が作り出されている。またこの歌曲はc-mollで開始し、e-mollで終結する和声構造を持つ。開始と開始と終結の調が異なる作品としては、他にもa-mollで開始しC-durで終結する〈終わりについて〉(JL. 1-22)や、e-mollで開始しF-durで終結する〈過ぎ去って〉(JL. 1-23)などがある。



「譜例3」〈幻影が蘇るとき〉の第2小節の第2拍（第5小節の第2拍）の偶成和音

〈分岐点の歌〉(JL. 1-24)では、とくに倚音による「半減7の和音」やV9(-13)の使用が効果的である。〈眠らない夜〉(JL. 1-25)は、動機労作が特徴的な作品である。またこの歌曲もes-mollで開始し、E-durで終結する和声構造を持つ。〈夜の歌〉(JL. 1-26)は、自筆譜の五線紙に酸化が見られることから、終結部分の一部の内容が判別できない。それでもV7(-13)を媒体とする転義や(第24小節)、属7の和音の異名同音的転義(第35小節)などの使用が確認できる。その最終小節は、ピアノ右手が[d<sub>6</sub>-fis<sub>6</sub>]であることが辛うじて分かる。そのため、楽曲の開始がd-mollであることを考えれば、恐らく同主長調D-durでの終結が目指されていたであろうことが、この点から推測される。

〈外側の人生の譚詩〉(JL. 2-63)でも、動機労作が明確に展開されている。冒頭の2小節で示される動機は、楽曲のさまざまな部分で展開され、そのことにより、さらに複雑な和声を誘発している。たとえば「半減7の和音」は、単独でもさまざまな部分で用いられているが、それに加えて保続v度上での使用や、あるいは転義を媒介する和音としても用いられる(第10、17小節)。また「減7の和音」の転義の使用も(第19、24小節)効果的に用いられる。

### 3. 結語

ベルクが生前に公表した歌曲は18曲に過ぎない。それ以外の歌曲に関しては、後にベルクがその一部破棄しようとしていることから、それら18曲とは異なる位置付けがなされるべきである。しかしベルクの自筆譜を丹念に見てゆくと、たとえ最初期の作品であれ、彼の自己批判に叶わなかったという理由で、それらを斥けることに逡巡させられるだけの魅力がある。本稿で対象とした最初期から1930年頃までの歌曲においては、一部の書法的な稚拙さは否めないものの、シェーンベルクに師事する以前に、ベルクがある程度の作曲スキルを獲得していたことを窺い知ることができる。その意味で、「秀作を作り上げようとする若々しい意欲に満ち(ている)」とする渡辺の指摘(1997: 203)は妥当と言えよう。それでは、青年期のベルクが拠り所としたものは何だったのか。

当時のベルクがとりわけマーラーへ傾倒していたことは、Scherliessその他の文献も指摘するところだが、網羅的な歌曲の分析を以てしても、マーラーの影響だけを特定する根拠は見出し得ない。

音楽的な意味では、むしろ Kimball の指摘する R. シューマン (Robert Schumann 1810-56) や、Chadwick の指摘するブラームス (彼の時期区分には賛同しかねるが)、そしてシェーンベルクなどの伝統的な歌曲作家からの影響を見出すことの方が容易であろう。しかしその一方で、たとえば〈星たちの衰微〉(JL. 1-13) に見られるような、この時代に趣向的な和声技法も見逃すことはできない。また本稿で対象とした歌曲では、中世の叙情詩人 W. v. d. フォーゲルヴァイデ (Walther von der Vogelweide 1170-c. 1230) から、ベルクとおよそ同時代人の詩人までの、かなりの広範囲からテキストが選ばれている。後者の詩人たちにおいては、今日では、その多くが顧みられなくなった点も否定はできないが、それでもベルクの文学的な素養の深さを伺うには、十分な査証となろう。

以上の点のみから、そこに Op. 2 の作曲者を早急に読み取ることは躊躇すべきであろうが、それでもベルクがロマン派からの流れを汲む、歌曲作家たり得る資質は指摘できると考える。そのことから本研究は、シェーンベルクに師事する以前 (1903年頃まで) のベルクの最初期の歌曲に対しても、歌曲史において、より高い評価と位置付けがなされるべきと、結論付けるものである。

## 註

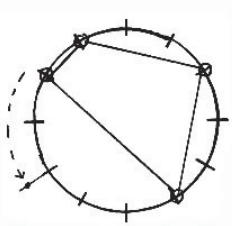
- 1) 正式なタイトルは《ペーター＝アルテンベルクの絵はがきの文による5つの管弦楽伴奏歌曲 Fünf Orchesterlieder nach Ansichtskartentexten von Peter Altenberg》。
- 2) Reich によればベルクの歌曲の合計は91曲、Scherliessによれば140曲、渡辺は88曲としている。
- 3) このデータは、基本的にはオーストリア国立図書館、ならびにウィーン市役所内図書館 (Wienbibliothek im Rathaus) 所蔵のベルクの自筆譜に依拠する。米議会図書館 (Library of Congress) 所蔵の歌曲の自筆譜は、多くがウィーン市役所内図書館の所蔵資料の複写と言えるため、議会図書館の資料は付加的なものとする Chadwick の指摘は正しい (1971: 123)。したがって、現存するベルクの初期歌曲のすべては、ÖNB 所蔵の自筆譜で網羅できる。実際、ウィーン市役所内図書館所蔵の歌曲の手稿は、ÖNB 所蔵の自筆譜を浄書したものも多く含まれている。
- 4) 1900年7月23日、ベルクは生涯の持病となる、喘息の発作にはじめて襲われる (Scherliess 1985: 264)。
- 5) Op. 1以前の器楽としては、《自作主題による12の変奏曲》(1908) などがある。
- 6) 2曲の〈私の両目を閉じて下さい〉は、Reich の論文の中で公表されている (1930: n. page (352-3))。
- 7) “JL. 2-36” は、“Jugendlieder Band 2” の目次の第36曲を意味する。「歌曲リスト」を参照。
- 8) 歌曲に付けられた整理記号 a ~ d は筆者によるものである。該当作品は「歌曲リスト」を参照。
- 9) テキストは『新しきもの古きもの Neues Altes』(1911) の「風景画カードの文章 Texte auf Ansichtskarten」から選ばれている。
- 10) 「減7の和音」は独特のひびきと転義の可能性の広さから、ロマン派以前から常用されてきた和音である。「減7の和音」はすべて短3度の構造となるため、そこには4つの転義の可能性が生じる。
- 11) 「半減7の和音」は、一般的に短調の固有Ⅱ度上の7の和音 (Ⅱ7) や、長調のⅦ7の和音に対して用いられる「通称」と言える。その構造は長9の和音の根音省略形 ( $X_9$ )、短調の付加6の和音、あるいは「トリスタン和音」とも共通し、複数の機能に転義し得る可能性を孕むものである。その官能的な音響とも相俟って、「半減7の和音」はとくにロマン派の作曲家に愛好された。
- 12) 「属7の和音」は、短9の和音の第5音下方変位における根音省略形体 (いわゆる「ドイツの6」) との異名同音の転義を、容易に媒体できる構造を持つものである。
- 13) 「クリスタル和音」(Kr.) は  $[3 + 3 + 5 + 1(+3)]$  の構造を持つ形態である (半音を1とする)。Kr. は L. v. ベートーベン (Ludwig Van Beethoven 1770-1827) のピアノ・ソナタ Op. 109 (1820) の第9-10小節、M.



ラヴェル (Maurice Ravel 1875-1937) の《ソナティナ》(1903-05) の第3楽章の第76-94などにも見られる。とりわけF. リスト (Franz Liszt 1811-86) やR. ヴァーグナー (Richard Wagner 1813-83) など、新ドイツ学派の作品に多くの例が見出される。以下にKr. のモデルと、その「12音圏」をあげる。



Kr. 減7



[3 + 3 + 5 + 1(+3)]

- 14) 荒川が「1903年の作曲」とする歌曲の多くを、ChadwickとRedlichは「1904-5年の作曲」としている。しかし、彼らの記述には1903年作曲の歌曲が殆ど見出されず、その一方で、1904-5年の歌曲の割合は余りに多い。その意味で、彼らの「1904-5年の作曲」とする記述には、疑問を呈する余地がある。
- 15) 増6の和音とは、一般にドッペルドミナントにおける、第5音下方変位の第2転回形の総称である。

#### 主要参考文献・楽譜

- Adams, Sara Balduf. 2008. *The Development of Alban Berg's Compositional Style: A Study of his Jugendlieder (1901-1908)*. Ph. D. Florida State University College of Music.
- 荒川奈月 2000 「アルバン・ベルクの初期の歌曲」『武蔵野音楽大学研究紀要』第32巻：1-15頁
- Berg, Alban. 1985-1987. *Jugendlieder. 23 ausgewählte Lieder*. 2 Vols. Herg. Christopher Hailey, Wien: Universal Edition.
- . 1960. *Zwei Lieder*. New ed. Wien: Universal Edition.
- . 1959. *Sieben frühe Lieder*. Wien: Universal Edition.
- . 1956. *Vier Lieder für eine Singstimme mit Klavier, Op. 2: nach Gedichten von Hebbel und Mombert*. Berlin: Robert Lienau.
- . 1953. *Fünf Orchesterlieder nach Ansichtskarten-Texten von Peter Altenberg op. 4*. Wien: Universal Edition.
- Berg, Erich Alban. 1985. *Der unverbesserliche Romantiker: Alban Berg, 1885-1935*. Wien: Österreichischer Bundesverlag.
- Chadwick, Nicholas. 1971. "Berg's Unpublished Songs in the Österreichische Nationalbibliothek." *Music & Letters* 52 no. 2 (April): 123-140.
- Griffiths, Paul. 1995 「リート——IV. ロマン派のリート」 藤本一子訳 『ニューグローヴ世界音楽大辞典』第19巻所収、463-70頁 講談社
- Hilmar, Rosemary. 1978. *Alban Berg: Leben und Wirken in Wien bis zu seinen ersten Erfolgen als Komponist*. Wiener musikwissenschaftliche Beiträge Bd. 10. Wien; Köln; Graz: Böhlau.
- Jarman, Douglas. 1980. "Berg, Alban (Maria Johannes)." In *The new Grove dictionary of music and musicians*, 2nd ed. Edited by Stanley Sadie and John Tyrrell. 3: 312-25. London: Macmillan.
- Kimball, Carol. 2005. *Song: a guide to art song style and literature*. Milwaukee, WI: Hal Leonard.
- 今野哲也 2013 「アルバン・ベルクの初期歌曲の『和声構造』——調性および『無調性』の分析理論の批判と分析方法の試論を通して」 博士論文 国立音楽大学大学、3月
- Landau, Anneliese. 1980. *The lied: the unfolding of its style*. Washington D.C: University Press of America.
- Perle, George. 1994 「アルバン・ベルク」 大倉文雄訳 『ニューグローヴ世界音楽大辞典』第1巻所収、

309-320頁 講談社

- Redlich, H. F. 1957. *Alban Berg: Versuch einer Würdigung*. Wien: Universal Edition.
- Reich, Willi. 1980 『アルバン・ベルク——伝統と革新の嵐を生きた作曲家』 武田明倫訳 音楽之友社 (原書: *Alban Berg; Leben und Werk*. Zürich: Atkantic Verlag AG, 1963.)
- . 1930. “An der Seite von Alban Berg.” *Die Musik* 22 Nr. 5: 347-53.
- The International Alban Berg Society. 1968. “Berg Documents in the Library of Congress.” *Newsletter*. No. 1 (Dez.): 10-11.
- Scherliess, Volker. 1985 『アルバン・ベルク——生涯と作品』 岩下真好、宮川尚理訳 泰流社 (原書: *Alban Berg*. Hamburg: Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH. 1975.)
- Stuckenschmidt, Hams. 1965. “Debussy or Berg? The Mystery of A Chord Progression.” *The Musical Quarterly*. 51, no. 3: 453-459.
- 渡辺護 1997 『ドイツ歌曲の歴史』 音楽之友社

〈オーストリア国立図書館所蔵の自筆譜〉

- Berg, Alban. *Jugendlieder Band 1. Autogr. Klavierlieder*. Autograph manuscript. Österreichische Nationalbibliothek Wien, F21. Berg. 2. Mus.
- . *Lieder für Singstimme und Klavier (Jugendlieder, “Alte Lieder”)*. Band II. Autograph manuscript. Österreichische Nationalbibliothek Wien, F21. Berg. 3. Mus.
- . *Lieder für Singstimme und Klavier*. Autograph manuscript. Österreichische Nationalbibliothek Wien, F21. Berg. 52/I. Mus.
- . *Jugendlieder*. Autograph manuscript. Österreichische Nationalbibliothek Wien, F21. Berg. 61/I. Mus.
- . *Zehn Lieder aus dem Jahre 1907*. Autograph manuscript. Österreichische Nationalbibliothek Wien, F21. Berg. 67. Mus.
- . *Sieben frühe Lieder*. Autograph manuscript. Österreichische Nationalbibliothek Wien, F21. Berg. 10. Mus.
- . *Sieben frühe Lieder (1907)*. Manuscript. Österreichische Nationalbibliothek Wien, F21. Berg. 3286. Mus.

〈ウィーン市役所内図書館所蔵の自筆譜・筆写譜〉

- Berg, Alban. *Aus “Der Glühende”*. Manuscript. Wienbibliothek im Rathaus, MHc 14342 (以下、曲名は省略)、MHc 4075、MHc 14211 ~ 14215、MHc 14322 ~ MHc 14327、MHc 14329 ~ MHc 14341.

〈ウェブサイト〉

- Österreichische Nationalbibliothek Musiksammlung. Accessed Feb. 28, 2015. <http://www.onb.ac.at/sammlungen/musik.htm>.
- Library of Congress Home. Accessed Feb. 25, 2015. <http://www.loc.gov/>.

アルバン・ベルク歌曲リスト

Nr.	"Jugendlieder" Band I	詩人	作曲年	作曲年	作曲年
1	Heiliger Himmel	Franz Evers	1901	1900-1	1900
2	Herbstgefühl	Siegfried Fleischer	—	—	c. 1902
3	Unter der Linde (Unter der Linden)	Walther von der Vogelweide	—	—	1900
4	Spielteut (Spilleute)	Henrik Ibsen	1902, Wien	c. 1902	c. 1902
5	Wo der Goldregen steht	Conrad Lorenz	—	—	—
6	Lied des Schiffermädels	Otto Julius Bierbaum	—	—	—
7	Abschied	Elimar von Monsterberg-Muenckenau	—	—	—
8	Liebeslied	Kory Towska	1902, 夏, Berghof	—	—
9	Über meinen Nächten	Dolorosa Pseudonym/ Maria Eichhorn	—	—	—
10	Sehnsucht I	Paul Hohenberg	1902, 秋, Wien	—	—
11	Vielgeliebte, schöne Frau	Heinrich Heine	—	?	—
12	Sehnsucht II	Heinrich Heine	—	?	—
13	Sternenfall	Karl(Carl) Wilhelm	—	c. 1902	c. 1902
14	Sehnsucht III	Paul Hohenberg	—	—	—
15	Ich liebe Dich!	Christian Dietrich Grabbe	1903, 前半, Wien	1904-5	1904/5 夏
16	Ferne Lieder	Friedrich Rückert	—	—	—
17	Ich will die Fluren meiden	Friedrich Rückert	—	—	—
18	Geliebte Schöne	Heinrich Heine	—	—	—
19	Schattenleben	Martin Greif	1903, 夏, Berghof	—	—
20	Am Abend (Im April)	Emanuel Geibel	—	—	—
21	Wenn Gespenster auferstehen	Felix Dörmann	—	—	—
22	Vom Ende	Marie Madeleine / Freifrau von Puttkamer	1903, 秋, Wien	—	—
23	Vorüber (!)	Franz Wisbacher	—	—	—
24	Scheidelied	Rudolf Baumbach	—	—	—
25	Schlummerlose Nächte	Martin Greif	—	—	—
26	Nachtgesang	Otto Julius Bierbaum	—	—	—
27	Es wandelt was wir schauen	Joseph von Eichendorff	1904	—	—
28	Liebe	Rainer Maria Rilke	—	—	—
29	Wandert ihr Wolken	Ferdinand Avenarius	—	—	—
30	Im Morgengrauen	Karl Stieler	—	—	—
31	Grabschrift	Ludwig Jakobowski	—	1904	—
32	Traum	Frida Semler Seabury	1904, 秋	—	—
33	Furcht	Georg Pusse(Busse)-Palma	1904	1904-5	—
34	Augenblicke	Robert Hamerling	1904, 秋	—	—

Nr.	"Jugendlieder" Band II	詩人	作曲年	作曲年	作曲年
68	Leben	Franz Evers	1905-9	1904-5	1904/5 夏
35	Näherin (Die Näherin)	Rainer Maria Rilke	1904, 秋/冬	—	—
36	Erster Verlust	Johann Wolfgang von Goethe	—	—	—
37	Süß sind mir die Schollen des Tales	Karl Ernst Knodt	—	—	—
38	Er klagt, daß der Frühling so kurz blüht	Arno Holz	1905 2 10	c. 1904	c. 1902
39	Ich und Du	Karl Busse	1904, 秋/冬	c. 1902	—
40	Fromm	Gustav Falke	—	1904-5	1904/5 夏
41	Über Nacht und Tag (通作版)	Otto Roquette	—	c. 1902	c. 1902
42	Tiefe Sehnsucht	Detlev von Liliencron	1905 2	1905 2	1904 or 1905
43	Über den Bergen (2種の版あり)	Karl Busse	1905	1904 or 5	c. 1902
44	Am Strande	Georg Scherer	—	c. 1902	—
46	Reiselied	Hugo von Hofmannsthal	1905-9	—	—
47	Spuk	Friedrich Hebbel	—	—	—
48	Aus "Pfungsten, ein Gedichtsreigen"	Franz Evers	—	—	—
49	Winter	Johannes Schlaf	—	—	—
50	Fraue, du Süße	Ludwig Finckh	1906	?	—
51	O wär mein Lieb jen Röslein rot...	Robert Burns	1905-9	c. 1902	c. 1902
53	Regen	Johannes Schlaf	1906	?	—
52	Verlassen	Böhmisches Volkslied	—	c. 1902	c. 1902
54	Traurigkeit	Peter Altenberg	—	—	—
55	Hoffnung	Peter Altenberg	—	—	—
56	Flötenspielerin	Peter Altenberg	—	—	—
57	Spaziergang	Alfred Mombert	—	—	—
58	Soldatenbraut (Die Soldatenbraut)	Eduard Mörike	1905-9	—	—
60	So regnet es sich langsam ein	Cäsar Flaischlein	1906 9 20	—	—
61	Eure Weisheit	Johann Georg Fischer	1906 9 18	1904-5	1904/5 夏
62	Grenzen der Menschheit	Johann Wolfgang von Goethe	1904 8	c. 1902	c. 1902
63	Ballade des äußeren Lebens	Hugo von Hofmannsthal	1903 11	—	—
64	Im Walde (Duett)	Björnsterne Björnson	1905-9	—	—
65	Viel Träume (Duett)	Robert Hamerling	—	1903	—
66	Der milde Herbst von Anno 45	Max Mell	—	1904-5	1904/5 夏
67	Was zucken die braunen Geigen	Maria Eugenia delle Grazie	—	—	—
69	Holophann	Artur von Wallpach	—	—	—
70	Mignon	Johann Wolfgang von Goethe	1907	—	—
72	Die Sorglichen	Gustav Falke	—	—	—
74	Trinklied (Aus dem Notizbüchlein der Liebe)	Karl Henckell	1905-9	—	—
78	Das stille Königreich	Karl Busse	1908	1908	—
79	Leukon (An Leukon)	Johann Wilhelm Ludwig Gleim	—	—	1908
81	Läuterung	Paul Hohenberg	1908, 夏	1904-5	1904/5 夏
Op. 2-4	Aus dem "Glühenden" von Alfred Mombert	Alfred Mombert	—	1909-10	—
75	Schliesse mir die Augen beide(簡易版)	Theodor Storm	1907	1907	1900

a	Mahomed's Gesang	Johann Wolfgang von Goethe			
b	Klagegesang von der edlen Frauen des Asan-Aga	Johann Wolfgang von Goethe			
c	Die Verwaisten	Reinhard Volker			
d	Märchen	Wolfgang Lehmann			

Nr.	"7 frühe Lieder"	詩人	作曲年	作曲年	作曲年
76	Nacht	Karl Hauptmann	1908	1908	1908 春
77	Schilflied	Nikolaus Lenau	—	記載無	—
71	Die Nachtigall	Theodor Storm	1905-6	1905(-6)	1905/6 冬
73	Traumgekrönt	Rainer Maria Rilke	1907	1907	1907 夏
45	Im Zimmer	Johannes Schlaf	1905	1905	1905 夏
59	Liebesode	Otto Erich Hartleben	1906	1906	1906 夏
80	Sommertage	Paul Hohenberg	1908	1908	1908 春

今野哲也

Tetsuya Konno

	<b>"4 Lieder" Op. 2</b>				
Op. 2-1	Schlafen, Schlafen, nichts als Schlafen!	Friedrich Hebbel		1909-10	1909-10 春
Op. 2-2	Schlafend trägt man mich	Alfred Mombert		—	—
Op. 2-3	Nun ich der Riesen Stärksten überwand	—		—	—
Op. 2-4	Warm die Lüfte	—		—	—
	<b>"5 Orchesterlieder" Op. 4</b>				
Op. 4-1	Seele, wie bist du schöner	Peter Altenberg		1912	1912
Op. 4-2	Sahst du nach dem Gewitterregen den Wald?!?!	—		—	—
Op. 4-3	Über die Grenzen des All	—		—	—
Op. 4-4	Nichts ist gekommen	—		—	—
Op. 4-5	Hier ist Friede	—		—	—
	Schliesse mir die Augen beide (1925年の12音 技法版)	Theodor Storm			

重複する作品を除けば、合計95曲となる。なお、通し番号と作品番号はベルクによるものだが、a～dは筆者による。